

「小樽学」ぎっしり一冊に

【小樽】小樽商大出版会は小樽の歴史や建造物、自然風土、ゆかりの文化人など同大の研究者らによる多彩な調査研究をまとめた「小樽学 港町から地域を考える」を刊行した。同大が新入生らを対象に開くリレー講座「小樽学」の内容を再構成した。写真や地図、図解をふんだんに使い、読者が「ディープな小樽」を学べる一冊となっている。

商大名物講座を再構成

同大の小樽学は2000年に始まった名物講座。同書は講座を担当する研究者のほか、市内の博物館や美術館の学芸員ら計23人が執筆した。江戸時代に小樽でアイヌ民族と和人の交易が行われていたことや、小樽沖の石狩湾で春から初夏にかけて見られる蟹気楼「高島おぼけ」について、幕末の探検家松浦武四郎も目撃して記録を残していることなどを、15章立て、12コラムで紹介している。

「ガイド本にも活用を」

発行は18年から同講座のコーディネーターを務める同大の醍醐龍馬准教授(白本政治外交史)が企画。「観光地にとどまらない魅力的な小樽を、さまざまな面から学ぶ契機にしてほしい」と話す。内容理解を助けるカラー、白黒の写真や図解も多数掲載。巻頭には各章やコラムの記述と市内に点在する関連場所が一目でわかる地図も加えた。醍醐准教授は「小樽を巡るガイドブックとしても活用できる」と太鼓判を押す。

A5判、420ページ。日本経済評論社(東京)が発売し、1冊3850円。小樽や札幌市内の主要書店で取り扱っている。

(久慈陽太郎)

多彩な分野の専門家が執筆した「小樽学 港町から地域を考える」を持つ小樽商科大の醍醐龍馬准教授。内容理解を助ける地図(右)も掲載した

